

「意」の「如く」と書く、「如意」という仏具があります。これは、法要やお説教などの時に、導師をつとめる僧侶が持ち、合掌をした両の手に挿んだり礼拝の時に真っ直ぐに立てたりとその威儀を正すことに用います。

その形は棒状でなだらかに曲がり、先端が雲の形に広がっていて、多くは木製ですが、古くは象牙や竹、鯨の髭、先端のみ金属で作られた物もあったようです。

これにはもともと、背中の痒い所を搔く、「孫の手」の役目を持っていたという説があります。

およそ三百年余り昔に出版された、『和漢三才図会』という百科事典によりますと、「爪の杖」と書いて「つまづえ」という記述があり、そこには持ち手のような丸い玉に長い棒が付いて、先端は子供の手の様な形になっている図が描かれ、「まこのて」とふり仮名があります。

「まこのて」ではなく「まごのて」とは何かというと、これは中国の漢の桓帝の時代、蔡経という男が、鳥の様な長い爪を持っていたとされる伝説上の仙女の「まご姑」に、その爪で背中を搔いてもらったらさぞかし気持ちいいだろうと想像していたところを王に見抜かれて叱られた、という故事からきた呼び名です。

それがいつしか、尖った爪は可愛い孫の小さな手を表現する様になったそうです。

その伝説から、「麻姑搔痒」なる熟語が生まれ、「痒いところに手が届く、物事が思い通りになる」という意味に用いられるようになりました。

「意」の「如く」と書く如意という仏具は、仏さまの教えを「まこのて」になぞらえ現したものだと考えられます。この他にも「隔靴搔痒」という言葉もあり、これは「手の届かないところが痒い、思い通りにならないこと」をいいます。

私たちの生活は、どちらかと言えばこの「隔靴搔痒」の方が多いでしょう。中々世の中の物事はそうそうすっきりとは参りません。

私たちは日常、心の底から湧きあがってくる「貪瞋痴」の三毒、即ち「むさぼり」「いかり」「おろかさ」を自覚し、押さえながら日々を懸命に生きていますが、痒いところに手が届く「如意」の様なお釈迦さまの教えをいただいて、もやもやとした気持ちをさっぱりと切り換えて自分自身の足元にあるおさどりの道をはっきりと確かめたいものです。